

第18回 なじみ

近畿大学 建築学部
准教授 山口 健太郎



【経歴】

京都大学大学院を卒業後、株式会社メトス、国立保健医療科学院協力研究員を経て2008年より近畿大学理工学部建築学科講師。2011年4月より現職。

特別養護老人ホームや小規模多機能型居宅介護などの研究を行うかたわら、高齢者施設の設計にも関わる。主な建物に「ケアタウンたちばな、設計監修、大牟田市」などがある。

前号では、高齢者施設の生活単位を取り上げ「なじみの関係性」を構築できる規模について言及した。今号は、「なじみ」というキーワードをより深く見ていきたい。まずは、言葉の意味を確認してみよう。

なじみ：なれて親しむこと。なれて親しんだこと。また、そのもの。

(広辞苑)

なじみという言葉には時間軸があり、なれて親しんできたこと・ものという過去から現在にいたる軸と、これから慣れて親しんでいくこと・ものという現在から未来に至る軸がある。さらに、過去から現在において親しんできたものが、未来においても親しみやすさを生み出すという一体的な軸もある。

この「なじみ」という言葉が建築学分野で普及してきたのは、1990年代後半に行われた認知症高齢者のグループホームに関する研究からである(文1)。当時は、認知症ケアに対する十分な知見がなく、症状に対する根源的な解決方法が明らかにされていなかった。徘徊という周辺症状に対しては、鍵を閉めるなどの行動を拘束するケアや、いくらでも徘徊できる回廊型の空間構成など、対処療法的な対応がとられていた。そのような中、北欧から輸入されるかたちで入ってきたグループホームが認知症ケアに大きな影響を与える。そして、その時に重要な概念として打ち出されたのが「なじみ」である。

「なじみ」の理論的背景は環境行動学にあり、環境行動学では自宅から施設への転居(環境移行)が認知症高齢者の症状を悪化させる大きな要因になっていると考えている。そこで、自宅と施設との環境の落差を小さくするとともに、

.....

新たに適応しやすい環境をつくることが認知症高齢者に対しては重要であると提唱している。つまり、これまで慣れ親しんできた居住環境の継続と、親しみやすい環境の創造を提唱しており、まさに「なじみ」の定義と一致する。環境移行による負荷の軽減や適応しやすい環境という難しいイメージを与えるが、「なじみやすい環境」をつくろうといわれるとわかりやすい。研究と実践、または政策を結び付けていくためには、イメージの共有化が重要であり、研究面だけではなくグループホームを普及させていこうという当時の先生方の意志が言葉の選びにも表れている。

さて、最後に認知症高齢者グループホームによる研究から明らかにされた「なじみの環境」について列挙しておこう。

① なじみの人間関係

大集団ではなく9人程度の小規模な集団で生活を営むことで、高齢者同士がなじみの関係を築きやすい。さらに毎日同じ職員が対応することにより、職員と高齢者になじみの関係性が築かれる。

② なじみの環境

建物の規模や各空間のスケール感を小さくすることにより、これまで生活を営んできた住宅に近い空間規模にすることができる。たとえば食堂や廊下は、面積だけではなく天井も低くすることにより親しみやすい空間スケールとなる。また、「家」の持つデザイン的イメージ（素材感、しつらえ）を取り入れることにより親しみやすい建物となる。ただし、囲炉裏や土間など伝統的な日本家屋の要素を取り入れる場合には、そこが非日常的な空間にならないように留意する必要がある。

③ なじみの行為

食事や調理、洗濯など日常的生活行為が高齢者の生活領域で行われることにより、これまでなじんできた行為を継続して行うことができる。調理や洗濯の手伝いは、高齢者の残存能力を維持・向上させるだけではなく、「誰かの役に立つことができる」という役割をつくりだすことができる。

文1) 巖爽, 石井敏, 外山義, 橘弘志, 長澤泰: グループホームにおける空間利用の時系列的変化に関する考察 「なじみ」からみた痴呆性高齢者のケア環境に関する研究(その1), 日本建築学会計画系論文集, No. 523, pp. 155-161, 1999. 9